

きぼうのたもと

N047 月刊

昭和七年五月一日 発行所 岡山県都窪郡吉備町東町三三三丁目方
吉備親老協会

○小学校々庭の忠魂碑

ニ、校門を入つた右側にある。高さ三三〇程、幅一三五程の御影石造りの大石碑である。撰文は元内閣総理大臣であつた大養 毅のものせるものである。この碑は同庭瀬町の社丁が明治廿七、八年（一八九一、九二）に起つた日露戦役に従軍し、遠く満州の荒野に馳驅し、赫赫たる武勲をあらわして戦場に散華した勇士や、九死に一生を得て故郷に帰り、農耕に親んだ勇士たちのために、戦の終つた五年後に建碑されたのである。銘に

甲辰乙巳。岡山県吉備郡庭瀬町社丁属第五师团（右島）。從征露國。而戰死傷死。瘞死及愛童創者各二人。其他（他）從軍矢死。夷險一節。凱旋録功。蒙賞者凡一百五人。嗚呼諸子同長。里閭（河）出入相伴。慶弔相扶。一旦國家有緩急。則義勇奉公。忠愛忘私。而迨（遠）其事平也。親兵鋤退。而耦畔田野。莫不愧（憐）乎為。聖主忠良之臣民。亦可以表。童子一邑者也。頃日有志胥議建碑。以圖不讓。來請予銘。予嘉其敦也。乃為之。

銘曰
死方何哀 生方何榮 惟我同胞 忠義作盟 死者盡取
生者有成 孰是來報 藏彼戈兵 穰々百穀 以資太平
無謂邑小 亦國之楸

明治四十四年辛亥四月 大養 毅 撰并書
裏面に、日露役戦歿者六名、北清事変戦歿者二名、日清役戦歿者三名の氏名を刻み、その下に日露役に従軍した百五名の官取、勲功、

氏名を列記している。これは太田菅太郎の謹書にして、石刻は木村 崇太郎である。

この勇士たちは若年にして人類の争いに卷込まれ、異郷の空で若し生涯を終つた尊き犠牲者である。戦後火の英霊を慰めるために敬愛のうち建てられた記念碑である。あしかり年を至るとともにその異常な死者と平和な死者を一元化して悲壯な戦死者を生んだ根柢を知ろうとするものは少なく、またこれを教え聞かせる識者も稀れである。出征の時に小旗を振つて「死んで帰れ」と勵まし、叫んだふるさとをいとは多かつたが、その重責な言葉は、つれか忘れ去られんとすえ思はれる。庶幾くばり 神佛より 安らかに眠る英霊に深い恵みを垂れさせ給ふことを。

（日清戦争の起りは、明治廿年に朝鮮の政治が乱れたので清國は大兵を半島に送り、また我國も出兵してやがて内亂は鎮定したが、清國は我國の撤兵を一方的に要求し、益々増兵し、七月には俄かに豊島沖で我軍艦に砲撃してきた。そこで我國は八月に清國に對して宣戰を布告し、明治天皇は九月に大本營を右島に置き、大軍を朝鮮に送つた。特野津道貫（倉敷の大原總一郎の外祖父に當る）は平壤に進んで清兵を破り、中将伊東祐喜は黄海で敵艦隊を却けた。陸軍は前進して北京に迫らんとしたので清國は和議を請ひ、翌年四月に下関で媾和條約が結ばれた。それは朝鮮の獨立を認む。遼東半島と台湾、澎湖列島の割讓、償金二億兩。其の他であつた。しかるに露國は俄、佛の兩國とともに東洋の平和を害すものとして遼東半島の還附を忠告してきた。この時我國はこれに反對する大の實力がなく、波を吞んでこれを容れ、土月に還附して代償として三千萬兩を受けた。これが三國干渉という。）

（北清事変は明治廿三年に清國に暴動が起り、天津の外人居留地を犯した。我國では生枝彬為が糾率したので、出兵することになり中將山口素臣が第五師團（右島にして備中はその管轄である）の師隊を引率し、列國との連合軍を組織して八月には北京に迫つた。そこで清國は、主謀者の處刑、償金四億五千兩、謝罪使を我國に遣はす。の條件で和議が成立したのである。）

(日露戦争は明治三十七年露國は我國との條約を破る。滿州に大軍を送り、旅順口の要塞を占有して艦隊を増強し、朝鮮の鴨綠江沿岸の地をおさめ、我國を危險に陥れる態勢をとつたので再三交渉したが、我國を侮りこれに意じなかつたので、同年二月十日露國に對して、戦山を宣した。中將東郷平八郎は海軍を率いて仁川港の敵を破り、進んで旅順港を封鎖した。ついで大將大山巖は諸陸軍を指揮して滿州に進撃し、また大將乃木希典は旅順を陥れ滿州軍と戦ひ、奉天の大合戦に敵軍十四日に亘り大勝した。この時露國の勦滅は、條約が成立した。條約は朝鮮の政治上と經濟上の卓越した利益を有することを認め、「明治廿五年に韓の國号を朝鮮に改めた。樺太の北緯五十五度以南の地を我國に割讓する。関東州の租借権と、着以南の鐵道及びこれに附屬する炭坑を我國に讓る。である。よる我國は旅順に鎮守府、関東州に都督府、樺太に廳を置き、又南滿州鐵道會社を設立し、長春以南の鐵道と鉱山を經營せしめた。朝鮮は戰後我國の保護國として京城に統監を置き、外交権を握り、内政を指導することになった。ついで四十二年八月には日韓合併したことは前に述べた通りである。)

三、大養本堂翁の記念碑

地上高さ一米半ばかりの築山をレフウラ、その上に高さ二二三種、横二四三種、幅二七種の石碑をたて、表面に

「本堂翁最後の言 語せはわかるとの碑 大賀一郎書」

と文書し、裏面に「昭和三十五年五月十五日建立、大養本堂翁碑建設委員会、石工当所、大月正亮」と刻んでゐる。筆者の大賀一郎は

川西の出身、理学博士である。(第三輯寺院篇、岩野山金剛院参照)



建碑の五月十五日は本堂翁が岩彈に外れた命日にして、二十九年目に當るのである。

除幕式は同年十月八日神式によつて嚴かに奉行せられた。当日は本堂翁の遺族を始め、岡山県出身の代議士数名が列席するの外、町民数百名が参加し吉備町祭足以來の盛大な式典が催された。

建碑の議は昭和三十五年一月一日町民の新年互社会の席上で語があり、出席者百余名が祭起人となり、町民全部から寄附金を募り建

設することに決議した。その費用は四十万円程度として各部落に割振りききめて祭足したが、五月末日で予定の半ばしか集まらなかつた。これでは困ると、祭起人中の祭起人といわれる人は「集まらなければ、われが所有の田地を売つて出すとか、われは本堂翁に恩顧になつてゐるので、書いてもらつた軸物を手放しすれば数万円は融出できる」と、殊勝な心がけの人もあつた。これが眞実とすれば結構なことだ、本堂翁をみたこともなければ何にも知らない他國からきた人たちにまで頭をさげてもよろかと、恩顧に預かつた人だけ建碑するのが当然なことである。それが誰れが、どう考え出したのか知らないが、自由民主黨へ働き、堂から四十万円の寄附を煩はす計畫が進められ、東京に出張して交渉した處、一も二もなく話がまとまつて首尾よく帰つてきた。間く處によるとこれは事務局長をしてゐる藤原節夫の斡旋の方によるものといわれている。結局総額六十万円。予算以上の金額となり前に書いたような盛大な除幕式が行はれたのである。ところがここに問題が起つた。それは同年十月廿日の衆議院議員の総選挙に前期の選挙に落選の藤原節夫が最高点を獲得したことがある。試みたその得票を示すと第一区、六三四二八藤原節夫。六〇四二四橋本龍伍。六〇三〇八山崎始男。五七四五七藤井勝志。五三四六星島二郎。であつた。当時巷間では藤原節夫が多額の買収費をばらまいてゐるとの噂が流れ、本堂翁の建碑資金は事前運動ではなかつたと思はれてゐた。俄然選挙の終つた翌日から藤原節夫の選挙違反の摘発が始まり違反容疑で逮捕された。または任意取り調べを受けたもの案に七三六八、そのうち起訴されたもの七十一人、略式違反を受けたもの一三三三人、起訴猶予になつたもの二三九人に達し、全国でも珍らしい違反者を出したのである。建碑の資金を政黨へ呼びかけたのは藤原節夫をめぐらしたのである。或は政黨及びこの機会を利用したものが、いらいぬ心配だが、後述の軌範ともなるべき清廉潔白人極である本堂翁の記念碑だけに、世話人も

慎重であつたと思はれる。もし不純な資金が集められ、美名のもとに建碑を酒の肴にかえて、私腹をこやし
ような汚れた心の人々が、假りにてあり、假りにてあり、一人でもいたとしたら、地下に眠る本堂石造りにどんな
類をしてまみえることが出来ようか。嘆かざるを得ないのである。(忠魂碑篇 終り)

○ 道標篇

西向の道標

大橋を西へ渡つて突当つた三又路にある。

地上高さ二四種、幅二五種、厚さ一六種の長方形の御影石造りである。

銘に 右面 古諸人 三宅辰太郎 高橋幸太郎

正面 右 毘沙門 左 金比ら 巾が 道

左面 右 吉備津宮

この毘沙門は、ここから約六村行つた庄村の山地、日差山の山中に
ある巨岩の表面を削つて、毘沙門天王の尊像を浮彫してゐるのに参
詣する道しるべである。石佛は高さ一三二種ある。この地は往古開拓
せられたと傳えられる矢部山主命と矢部麻呂の二神を祀つた日指明
神の社地であつた。(一言に日指は吉備津彦命の随神夜目山主命、夜目丸を奉祀す
とあり、これは「ヤベ」ヨメ同音に「回」祭神である)。御津郡芳賀の出身で名僧の譽れ
高い報恩大師が、奈良朝時代、佛教の全盛を極めた孝謙天皇の天平
勝宝六年(七五四)にこの淨域を相して、山岳伽藍を叙建した。これが
日差山廿二坊と稱せられる由緒ある聖地である。往昔は一帶の山中
に興聖坊、多圃坊、王藏坊、淨土坊、曼陀羅坊、満願坊、井上坊
養福坊 見松坊 成福坊 特室坊 吉祥坊 宝嚴坊 宝藏坊、石
槲坊 大藏坊 実相坊などの坊舎があり、また山下には岡ノ寺とい
ふ神皇坊、田老坊、百々坊、楨山坊、受法坊等の堂塔が樹林中に豊
を列ねてゐたが、天慶の乱以来武家が執興し、五百余年後の應仁の

乱には全く傳統は紊亂した。偶天正十年の高松の役に毛利方の部将
川早川隆景が、山上に陣地を設け、これより類發すること甚だしく
慶長十年には徳川幕府開府してこの地は夜瀬藩主戸川肥後守達安の
所領地となつた。この時代にはこれ以前に満願坊は日差山法泉寺に
興聖坊は庄村の弘福山西方院に、曼荼羅坊も庄村の地に、淨土宗は
庄村の西部山無量院に、大藏坊は撫川大内田に(別項参照)、見松坊は
庄村の法轉山蓮光寺に、石槲坊、吉祥坊、宝藏坊、持室坊、宝嚴坊
の五坊は生石村(足守)に、西南坊と受法坊は山地に、これらも平地に
遷轉再興するなど、日差山にはその旧址が到る處の樹間にみられる。
現在その遺蹟には毘沙門天を祀る多圃坊と稱する一寺坊が、いま
は日差山日差寺と改めて日差山の四、法燈を傳承し、その名残りを
止めてゐるのみ。

この毘沙門天は報恩大師が自ら巨岩に本地佛の多圃天の尊像を彫
刻せられたといわれる傳説である。この佛像が日指の神として後在
庶民に尊信せられたといふのである。寺宇は後ちの時代に再建した
ので、永く山地の日蓮宗受法寺の管理に属し佛事を営んでゐたが、
岡山地方に特に信徒が多く、願望によつて昭和三十一年四月受法寺
から分離して独立聖堂に當ることになつた。祭る處の本尊は聖觀世
音菩薩を安置してゐる。

日差山の叙建者報恩大師は元享祇書によると、御津郡馬屋下村大字芳賀の人といひ、卑賤
な家に生れた。誕生場所は詳でない。大師は十五才にして出家し、三十才の時吉野山に入り、觀音音
の呪術を持し、四十五才にして靈感を得て、天平勝宝四年に孝謙天皇の御不豫の時、勅命を
奉じて加持祈禱した。靈驗あらたみにして回をなく平癒せられたので、報恩の稱号を賜はつた。
また桓武天皇が長岡の宮で沈病に罹り結ひ、巫医せられたが、効果がなく、報恩大師に勅して加持

せしめられた。大師は目を閉じて根本呪術を行ふこと五十遍に及び、病はたす所に瘥中。これから
玉皇の殊遇を受け、封戸若千と賜ひ、延暦十四年(七九五)六月示寂した。年は詳かでない。
大師は天平勝宝四年三月に和泉國高市郡子島神祠の畔に子島寺を創建し、五五五種の
觀自在菩薩の像を安置したという。報恩大師の弟子智々禪師は当山(日差山)の修業
僧にして心淨大師ともいひ、時の桓武天皇が眼病に悩まれた時、朝廷に伺候して平癒祈願の
修法を行つて奇瑞をあらわれ、帝の敬慮を慰め奉りたという。日差山の旧址に玉皇(おと)の廟
と稱する處がある。心淨大師の終焉の地である。元は兄弟(元と)の十支十子の甲(きの元)の次
子の乙(きのと)であつて、報恩大師を甲とし、心淨大師を乙とされたのである。また弟子に延鎮
禪師といふ高僧がある。初め子島寺に住したが、征夷大將軍坂上田村麻呂(朝鮮系統の人)の夫人
の病をなおして將軍の感喜に接し、觀音寺を建立した。其後延暦十六年、將軍が奥州地方に征
討の時、大悲の加護を祈願した處、奇瑞によつて大勝利、凱旋の後、桓武天皇に奏して勅願
の道場に定められた。ついで登壇になつた長岡の紫宸殿、其の他皇城の殿舎を下賜せられ、
伽藍を建立し、延鎮禪師をして開基せしめ、改名したのが、いまの京都にある音
羽山清水寺である。日差山には地名に半堂山といふ處がある。古の諸坊の中心地であつたらうと
思はれる。ツイシ内には蘇子師堂といふ地名がある。また愛染畑は愛染堂のあとと云ふ。仁王畑は仁王
門(終門)のあとであらう。聖武天皇が(七四一—八四八)が各回毎に回分寺を創建せらるる時
「天地と永く流れ、擁護の恩、光明に被りて恒に満らん」と詔勅せられた佛教全盛時代を凌
び奉るものである。

古書を繙くと、毘沙門天といふ譯は、毘摩の誕生以前に印度地方の住人たちに深く信仰せられて
いたのである。大勢の夜叉鬼神たちを従へて、恐ろしい暗黒の世界を支配する最も強力な神である。ま
た財宝や福徳を掌り、常に北方のヒマラヤ山中に住んでゐると信じられた。やがて印度に佛教が盛
んになつてから、佛教の守護神とする四天王の一人である。即ち四天王とは曼陀羅の四方の隅に書
みかゝるもので、東方は持國天王、南方は增長天王、西方は広目天王、北方は毘沙門天である。
毘沙門天はまた「多聞天王」ともいふ。これは佛教を守護する上に説法の道場を教言備してゐるの
で

説法を全部聞くことが出来たといふ處から「多聞」という名が起つたと傳へられてゐる。我國では佛
教傳來とともに昔から信仰が厚く、聖徳太子(千代村に載せらる)が物部守屋を誅滅されよう
とした時、この尊像を頭髪の間に入れて戦勝の守り尊にされ、ついに物部氏を滅ぼして國家
の安泰を討られたので、その利益(りやく)を讃えて四天王寺の創設を發願なされたことが、日本書
紀に見える。毘沙門天の尊像は種々の形態があるが、如意宝珠を持つてゐるもの、矛を持つ
てゐるもの、御顔は四つ、手が十本、その一つ一つの手に刀を握つておられる姿などがある。一般の
姿は七宝で飾られた鎧を身に付け、左手に矛を持ち、右手を腰に当ておつてゐるもの、(右)手
の掌に小さな多宝塔を載せ、左手は矛を立て、足の下には二匹の夜叉鬼を踏みつけて両足をひろ
げて威力を示したもの(日差山の彫刻はこれである)などがある。

この神は聖徳太子が守護神にされてから財宝や富貴を司るとともに、大勢の夜叉鬼(驚恐を勇猛)
(を著爲に從えて、ことある毎に人間の毒界を護るので、國家鎮護、惡敵退散の軍神として
庶民一銀から信仰されてゐるのである。

日差寺から背後の山道を辿ると、一軒のあまりで舊縁の寺にあり、古
城趾に達する。ここは天正十年の高松城の合戦の時に、毛利方の部
將小早川隆景が本陣を構えた處で、遙か北方に攻撃軍の羽柴秀吉が
本陣を置いた龍王山と相對して、視界はひろく、眼下の吉備平野を舞
台に、足守川を挟んで一大攻防戦が展開せられた古戦である。

○定抗の道標と石塔 (藤四郎戰争高松城の水攻参照)

倉敷へ通ずる旧国道から岐れて大内田を経て妹尾、早島方面へいく
三叉路の西側にある。高さ地上約五尺、台石のある一尺角のもので
ある。東面 左 金刀比羅道。西面 左 岡山、吉備津道。

北面 右 倉しき、王レ満(宝島)道
南面 明治十四年庚辰一月吉日辰建焉
寄附方 雄波定三郎 平川源吉 雄波藤作

と刻んである。この道しるべから南へ、つた東側の路傍に花崗石製の高さ二六種、笠石、火袋、軸石を一本造りにした三稜角の石燈籠がある。

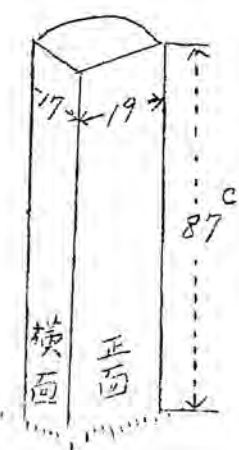
軸石部の北面に 奉燈 南面に 明治三十八年九月吉日とあり。その東に横六種、幅三種、高さ三三種位の水鉢石がある。正面は西に向い、明治十三年 奉納 庚辰とあり。東面より北面にたけて、寄附者 平川重平 荒木龜造 老畑甚七 荒木〇〇

の(〇印は不明)七人の名前が見える。これは前記石灯籠の建立より二十五年も古い。どこからにあったか、ここには運んで据へ置かれたものらしい。

○大橋の東の道標

大橋を東へ、つた曲り角の南側、二三番地池上唯次の地先にある。地上高さ八七種、長方形の石柱にして上部は饅頭形につくられている。石刻に 右面 左 面 吉備津宮 廿町 道

正面 右 下津井 五里 道
左面 慢迷方 建之 七町氏 野崎氏



裏面 寛政九(以下不明)(七九七)

この道標は撫川領主四代戸川達邦の時代である。書体は草字にして優雅な筆法である。慢迷方とは「行く道の方向に惑い、迷っているもの」と解すべきか。交通の繁達してない旧幕時代に幾千人、幾万人の旅行者が、この道しるべ、恵を受けて東西に往來したことであ

○東山の道標 (一)

東山の部落を通り抜けて吉備津神社へ至る道路の傍にある。長さ二三種、三稜角の花崗石につくられている。下部から三種ほどの處から折損したま、放置してある。四面の銘に

「左 志んぐう社宮」。「右 庭せ 中がごんげん」。「是より吉備津宮 三丁」。「弘化二年己正日建之」とあり。

○東山の道標 (二)

宮内を通ずる東山部落の三又路の處を流れている小川の名に「一基棄てられて」いる。長さ七五種、一五種角の石柱に

右 庭瀬駅道。左 新宮社 遍んろ道。明治四十一年十月吉日 建之。

○平野の道標

この道標によると、当時庭瀬駅へいく道は川入、中田地内を經て庭瀬の所を通るのが順路であったが、廿五年後の昭和七年に八幡山の正面から直ぐに道路が完備して近道が拓けたのである。(新宮社は後三輯宮祠蓋並に第三輯幸院家貞如院参照)

庭瀬駅前を西に曲つた旧国道の北側、路傍にある。高さ二五種、一三種角の石柱に、「距岡山(二里)」。距下津井(五里)」。距三石(以下不明)」。明治十八年(以下不明)」。柘孤内は土に埋没して定みでない。(おわり)

建設業・ホーリング部増設

本社 工場 都窪郡吉備町庭瀬 吉備局電三三番 岡山営業所 岡山局電②七〇七

家具製作 室内裝飾

有限 所司組 取締役社長 所司利男 都窪郡吉備町下撫川・吉備局電 三〇九番